

飛鳥井雅経の『千五百番歌合』詠

稲葉美樹

はじめに

『千五百番歌合』（以下原則として本歌合とする）は、歌合史上最大の規模を誇る歌合であり、また『新古今集』撰集資料中、入集歌数第一位を占める点でも重要な意義を持つ。本歌合は、後鳥羽院が正治二年（一一〇〇）に催した『正治初度百首』『正治後度百首』に続いて召した第三度百首を結番したものである。建仁元年（一一二〇）六月頃に詠進され、同二年九月頃判進の命が下り、歌合として完成したのは同三年春頃と考えられている（注一）。一方建仁元年には、七月に和歌所の設置、十一月に撰者の下命が行われており、本歌合は『新古今集』撰集事業が開始された時期に、同時進行して成立したことになる。

本歌合の詠者の一人である飛鳥井雅経は、詠出の前年に当たる正治二年に、後鳥羽院や源通親が主催する歌会等に参加し始めており、『正治後度百首』は彼にとって初めての大規模な和歌行事である。ただし『正治後度百首』は、『正治初度百首』に洩れた歌人を主として選んでいると考えられており（注二）、本歌合は、建仁元年二月に行われた『老若五十首歌合』に続いて当時の主要歌人の列に加えられた、雅経にとって記念すべき行事であった。成績は二九勝二九持三一負不明一（注三）、一四首が勅撰集に入集（うち、『新古今

集』入集は一首）している。既に『正治後度百首』で、彼の作歌の力量は後鳥羽院らにある程度認められ、『老若五十首歌合』および本歌合により、他の歌人達にもその実力を知らしめることになったものと思われる。本歌合成立過程において彼は『新古今集』撰者の一人に加えられたのであり、本歌合は雅経和歌を考える上で最も重要な作品の一つであろう。本稿では、『千五百番歌合』における雅経詠の特徴を明らかにし、雅経和歌全体においての本歌合の位置づけを考えてみたい。

雅経の『千五百番歌合』詠の検討

雅経は本歌合において、多くの本歌取詠と、流行表現・新しい表現を用いた歌を詠んでいる。また、雑歌にも特色が見られる。そこで本稿では、本歌合の雅経詠について『正治後度百首』・『老若五十首歌合』と比較しつつ以下の点から検討し、その特徴を明らかにしたい。すなわち、（一）本歌取詠、（二）流行表現・新しい表現、（三）雑歌、の三点である。

（一）本歌取詠

本歌合の雅経詠に、本歌取と思われる歌は三三首ある。『正治後

度百首』の二二首(注四)、五十首歌である『老若五十首歌合』の一四首と比較して増加している。このうちの何首かを取りあげてみたい。

秋

一六二七(二四八) 深草やあきさへこよひいでていなばいとどさびしき野とやなりなん

・年を経て住み来し里を出でていなばいとど深草野とやなりなん
 『古今集』卷一八、雑下、九七一、在原業平・『伊勢物語』一三二段

本歌とされることの多い著名な古歌を取り、暮秋に主題を移した詠である。「あきさへこよひいでていなば」は、男だけでなく秋までが今夜出て行ってしまったら、と思いやったもので、寂寥感は表出している。しかしこの歌について判者の藤原定家は「いでていなばいとど、野とやなりなん、文字のおき所いたくかはれるところなくや」と述べ、持としている。雅経の本歌取については本歌を取りすぎる傾向があることが指摘されている(注五)。この判詞は、二句と三文字が本歌と同じ位置に置かれていることをいったもので、取りすぎを指摘したのではないが、本歌が強く意識されてしまい、新しさを感じにくいという点では共通していると思われ、注意すべき指摘であろう。そして本歌合における雅経歌には同様の例が複数見られる。

春

一一〇(一九七) 若菜つむゆかりに見ればむさし野のくさはみながらはるさめの空

・紫のひととゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る

『古今集』卷一七、雑上、八六七、よみ人しらず

春

三〇六(二〇四) たにかぜや山もかすみのひまごとにもたうちいつる花のしら浪

・谷風にとくるこほりのひまごとにうちいつる浪や春のはつ花
 『古今集』卷二、春上、一一一、源当純

夏

六一五(二一四) そでのいろもうつりにけりな夏衣はるはくれぬとながめせしまに

・花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
 『古今集』卷一、春下、一一三、小野小町

秋

一〇六五(二二九) あさくらやきのまろどのにたがとへば秋をもなのるをぎのうはかせ

・あさくらやきのまろどのに我がをれば名のりをしつづ行くは誰が子ぞ
 『新古今集』卷一七、雑中、二六八九、天智天皇

いずれも二句と幾文字かを取っており、そのうちの約二句を本歌と同じ位置に置いている。一一〇は、四季詠に転じた作で、春雨の空の下で若菜を摘む光景に新春らしさを感じられるもの、本歌と同一の第三・四句の印象が強く、あまり新しさが感じられない。三〇六は、本歌が浪を花に見立てているのに対し、場を河から山へ移

し、花を「花のしら浪」と表現したものである。本歌と同じく春の歌ながら、景を変えることにより主題を転じている。しかし、約二句のほか「うちいづる」「花」「浪」の三語が本歌と共通しており、本歌を取りすぎていると思われる。六一五は、主題を更衣に転じたもので、花の色の変化という自然現象を、袖の色が変わるといふ人事に転じた点には面白さがある。ただし、当該歌の「ながめ」は惜春の思いのみであり、花の変色に我が身の衰えを重ねる小町歌の「ながめ」ほどの切実さは感じられない。一〇六五は、名のる存在を人間ではなく荻の上風として、秋の訪れを表現した点に面白さがあるのではないだろうか。このように、本歌合における雅経の本歌取詠には、二句余を取り、それを本歌と同じ位置に置いている歌が少なからず見られ（注六）、その中には本歌を取りすぎていると思われる歌も存する。しかし六一五・一〇六五のように主題の転じ方に工夫が見られる作も含まれる点は注意してもよいのではないだろうか。

本歌合中の雅経の本歌取詠の秀作としては次のような例がある。

秋

一四八七（二四三）いはしろの野辺のしたくき吹く風にむすほほれる松むしのごゑ

・岩代の野中に立てる結び松心も解けずいにしへ思ほゆ

〔万葉集〕巻二、一四四、長忌寸麻呂

有馬皇子の謀反事件のあった昔を思う本歌を、晩秋の佳しい野の様を詠んだ叙景歌に転じている。「岩代」を詠んだ歌には、この長忌寸麻呂歌、並びに有馬皇子の「岩代の浜松が枝を引き結びま幸く

あらばまたかへり見む」（『万葉集』巻二、一四二）により、「松」ならびに「結ぶ」「解く」などの語が詠み込まれることが多い。雅経詠もその点では伝統を踏まえたものとなっているが、久保田淳氏が指摘されるとおり、「松を松虫に転じ、その声を『むすほほれたる』とした」点に新しさがある（注七）。

春

五三一（二一一）くれぬともいかが見すててたちばなのたづねこじまの山吹の花

・今もかもさきにはほらむ橘のこじまのさきの山吹の花

〔古今集〕巻二、春下、一一一、よみ人しらず

内容的には特に新しさはないが、「たち（はな）」に「発ち」が、「こじ（ま）」に「来し」が掛けられていることにより、言葉同士の結びつきが緊密になっており、リズム感が生まれている。藤原俊成が判詞で「両方のこじまのやまぶき、もじつづきともにとりどりにをかしく見え侍り、よき持なるべし」と述べているのは、そのような点を評価したのであろうか。

本歌合と『正治後度百首』とで同一の歌を本歌とした作が二組ある。次にそれを比較してみたい。

春

五四（一九五）こほりとくおきつはるかぜふきぬらしみぎはにかへるしがのうらなみ

浪
かすみゆくままにみぎはやへだつらんまたとほざかるしがのうら
『正治後度百首』二〇四、霞・『明日香井集』九七

・さよふくるまにみぎはやくほるらんとほざかりゆくしがのうらなみ
 『後拾遺集』巻六、冬、四一九、快寛

秋

一二〇五（二三四） たつねてもたれかはとはんみわの山きりのまがきにすぎたてるかど

たつねくる人はおとせで三輪のやますぎのこずゑの雪のしたをれ

『正治後度百首』二四五、雪・『明日香井集』一三八

・わがいはほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど
 『古今集』巻一八、雑下、九八二、よみ人しらず

五四は、季節を本歌の冬から春に変え、汀に浦波が返って来たことにより、沖に春風が吹いたらしいと推量するものである。本歌の、浦波の音が遠ざかって行くことにより、汀が凍っているのだろうと推量する内容と、逆の状況を詠んでいる。春の訪れを喜ぶ思いは読み取ることができるものの、新しい要素は春風だけであり、本歌に大きく依存していると思われる。一方『正治後度百首』歌は、春の訪れにより氷が解けて、一度は汀近くまで戻ってきた志賀の浦波が、霞に隔てられて再び遠ざかってしまったと詠むものであるが、本歌の語句を取りすぎていることを既に指摘した（注八）。しかし内容的にはむしろ、実際に波が汀から遠ざかっているのではなく、霞がたちこめているために見えなくなったことを遠ざかると表現した『正治後度百首』歌の方に発想の転換が見られ、面白さが感じられる。二番目の例では、一二〇五、『正治後度百首』歌ともに、「とぶらひきませ」と誘う本歌に対し、訪れない孤独を歌う。一二〇五は季節を秋に設定し、霧に包まれた籬を配する。一方『正治後度百

首』歌は季節を冬とし、目印のはずの杉の梢が雪の重みで折れる音を詠む。霧の籬に風情が感じられるものの、孤独をより強く感じさせるのは、雪に閉ざされた中で梢が折れる音だけが響く状況を詠んだ『正治後度百首』歌であろう。この二例の場合、いずれも『正治後度百首』歌の方がやや優れていると思われる。本百首が詠出されたのは、『正治後度百首』詠出から約半年後であり、比較的短期間に同一の本歌によって詠作することには多少難しさがあったのであろうか。

以上、雅経の本歌合における本歌取詠を検討してきた。新しさの見られる作も存するものの、一方では本歌の二句余を取り、それを本歌と同じ位置に置いている例も多数見られた。雅経の本歌取については取りすぎを指摘されることが多い。二句余を取ること自体は必ずしも取りすぎとは言えないが、位置も同一であると、本歌が強くイメージされてしまう。本歌に対する依存度が大きいという点では、取りすぎということと共通していよう。ただしそれらの中にも主題の転じ方に工夫が見られる作も存する。また、本歌合と『正治後度百首』とで同一の歌を本歌とした二例はいずれも、どちらかというところ『正治後度百首』詠の方に着想の点で見べきものがあると思われる。

(2) 流行表現・新しい表現

雅経は流行表現・新しい表現を、『正治後度百首』において十三例、『老若五十首歌合』において十例用いていたが、本歌合では十例見られる。

春

八二(一九六) はれやらぬ雲はゆきげのはるかせにかすみあまぎる
みよしのの空 (『新後拾遺集』卷一、春上、七)

・とやかへるしらふのたかのこるをなみゆきげのそらにあはせつ
るかな (『後拾遺集』卷六、冬、三九三、藤原長家)

・そらは猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春のよの月

(『新古今集』卷一、春上、一三三、藤原良経・『千五百番歌合』一三三)

「ゆきげ」は、同音の「雪消」は『万葉集』に既に見られるが、当該歌のような雪模様への「雪気」は、勅撰集では『後拾遺集』初出。「新古今好みの歌語であった」(注九) ことが指摘されているとおり、『拾玉集』に十例、『後鳥羽院御集』に九例、『秋篠月清集』に七例、『壬二集』・『明日香井集』に五例見られる。当該歌と良経歌とは、「はれやらぬ」「かすみもやらず」という微妙な空模様で冷たい春風を配し、冬の名残を感じさせながらも春へと移りつつある季節を捉える発想が共通しており、当該歌は良経歌の影響下に詠まれたのではないかと思われる。なお「あまぎる」は、「雪」と、雪との類似により「花」に用いられることが多いが、数は多くはないものの、「霞」「月」などにも用いられるようになった(注十)。当該歌はその例である。

秋

一一七七(二三三) さきにはふちくさのはなのすゑばより

うすぎりなびく野辺のゆふかせ

・うすぎりの籬の花のあさじめり秋はゆふべとたれかいひけむ

(『新古今集』卷四、秋上、三四〇、藤原清輔・

『久安百首』九三八・『清輔集』一一三)

・うす霧のたちまふ山の紅葉ばはさやかならねどそれと見えけり
(『新古今集』卷五、秋下、五二四、高倉院)

「薄霧」は、清輔歌が早い作例か。勅撰集では『新古今集』初出の新しい歌語である(注十一)。京極派に生まれ、勅撰集全体で一七例見られる中、『玉葉集』に二例、『風雅集』に一一例存する(注十二)。当該歌や清輔歌のように、狭い範囲の薄霧をクローズアップして詠む場合と、高倉院歌のように薄霧越しに見える広大な景を詠む場合のほか、薄霧の晴れた後の景を詠む場合とがある。いずれの場合も自然のかすかな変化にまで目を凝らして捉えようとする姿勢を見ることができるといえる。当該歌は、上二句の遠景から「末葉」に焦点を移し、そこから薄霧が靡く繊細な景を捉えている。千種の花のとりどりの色から末葉の緑へ、さらに霧の淡い白色という色彩の変化も美しい。

冬

一九三七(二五八) なみのうへにともしちどりうちわびて月にう
らむる在明のこゑ (『新統古今集』卷六、冬、六六七)

・ひさぎおふるきよきはらに月さえてともなし千鳥ひとり鳴く
なり (『林葉集』六六二)

・あらし吹くとしまがさきのいりしほにともし千鳥月になくな
り (『正治初度百首』冬、三七一、守覚法親王)

「友なし千鳥」は、「歌語『友千鳥』を念頭にした表現。群から離れた千鳥。」(注十三)とされる。ただし、「友千鳥」も『堀河百

首』『田多民治集』に見られるのが早い作例で、平安後期に生まれた歌語と思われる。「友なし千鳥」は、『林葉集』初出の新しい表現で、近世を含めても用例は四十例ほどでさほど多くない。勅撰集に入集しているのは当該歌のみ。本歌合ではほかに丹後が用いている。ここに示した例のように、ほとんどの場合孤独の中で鳴く千鳥を詠む。詠歌内容に変化をつけにくいことがあまり多用されなかった理由であろうか。

以上のほか、本歌合において雅経が用いている流行表現・新しい表現は、「志賀の浦波」〔五四（一九五）〕、「霞の袖」〔一六六（一九六）〕、「下露」〔一二六一（一二三六）〕、「心の果て」〔二一三三（二六五）〕、「初煙」〔二二七五（二六九九）〕、「伏し葉」・「下乱れ」〔二三〇三（二七〇）〕である。これらのうち「志賀の浦波」を、雅経は『正治後度百首』・『老若五十首歌合』でも用いている。「霞の袖」は、霞を衣に見立て、たなびいた先を袖にたとえた表現で、『老若五十首歌合』でも用いている。「初煙」は、当該歌以前に用例はなく、以後も少ない。以上のように流行表現・新しい表現を用いた歌は見られるものの、『正治後度百首』・『老若五十首歌合』ほど多くはない。また、『正治後度百首』においては、流行表現・新しい表現の様式を参考に雅経が独自に考え出したと思われる表現も六例見られたが、本歌合に用いられた雅経以前に用例のない表現は「初煙」のみである。しかもこれは初めて立つ煙の意で、目新しさを感じさせる表現ではない。本歌合においては雅経は、『正治後度百首』・『老若五十首歌合』の際ほど積極的に流行表現・新しい表現を用いているわけではないと思われる。

(3) 雑歌

次に、本歌合における雅経の雑歌について検討したい。雅経の雑歌は、旅の歌に集中している。始めに十首すべてを示す。

- 二七二六（二八四） あづまやののきのしのぶのすゑのつゆいくあさ
おきのそでしたふらん
- 二七五五（二八五） やどれとやこけのさむしろうちはらひたび行く
ひとを松の下風
- 二七八三（二八六） 雲にふしあらしにやどるあしびきの山のいくへ
のゆふぐれのそら
- 二八一（二八七） あととめてとまるかたなきうきねかなさこそう
きたるなみぢなれども
- 二八三九（二八八） 風わたるまつのしたねのさ夜まくらゆめぢとだ
ゆるあまのはしだて
- 二八六七（二八九） たまもしきそでにくいその松がねにあはれかく
るもおきつしらなみ
- 二八九五（二九〇） けふも又をぎのすゑばをそらに見て露ふりくら
すむさしののほら
- 二九二三（二九一） 草の葉にしをれふしぬる袖まくらゆめやはむす
ぶよはのしら露
- 二九五（二九二） 野べの露山のしづくとたちぬれてかごとがまし
きたび衣かな
- 二九七九（二九三） あはれとてしらぬ山ぢはおくりきと人にはつけ
よありあけの月

『玉葉集』卷八、旅、一一五五

このうち一首目の二七二六と七首目の二八九五は、一見すると旅の歌ではない。しかし、羈旅歌八首の中に二首だけ異なる主題の歌が入っているとは考えにくいと思われる。この二首も旅に関する歌と解することはできないであろうか。すなわち、二七二六は、東屋の軒の忍ぶ草の先に、露は幾朝置いて、朝早く起きて旅に出てしまった私の袖を慕っているであろうか、と、留守宅を思いやる歌として解釈できるのではないだろうか。「いくあさおき」は解しにくい、が、「幾朝置き」と「朝起き」の掛詞と解する。また、二八九五は、旅の途次に目にした風景を詠んだ歌として理解できないであろうか。このように考えることが可能であれば、雅経の雑歌は旅の歌群として捉えることができる。同様に本歌合において雑歌に統一性を持たせている歌人に、源家長と寂蓮がいる。家長歌は、解しにくいものもあるが、いずれも和歌の繁栄を詠んだ祝言の歌ではないか。また、寂蓮歌は、『法華経』巻第七の「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」によって詠まれていることが、半田公平氏によって指摘されている(注十四)。この三者以外の歌人に目を転じてみると、本歌合の雑歌で旅を詠んでいるのは、後鳥羽院・藤原公継・同公経・同季能・同隆信・同有家・同保季・同良平・源具親・顕昭・惟明親王・藤原兼宗・源通光・俊成女・丹後・越前・源通具・藤原家隆で、二十七人中一八人、それぞれ一首から三首にとどまる。さらに、本歌合詠出時に成立していた勅撰集とも比較してみたい。七集のうち、「羈旅」部が設けられていないのは、『拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』の三集である。『拾遺集』においては「別」部に羈旅歌は入れられている。『金葉集』・『詞花集』においては「雑」部に羈旅歌が見られるものの、三集とも十首に満たない。「羈旅」部が設けられていない場合、「雑」部に旅の歌が分類されることは自然であろうが、

雅経のように旅の歌に集中するのは、意図して行われたことと考えるを得ない。雅経は、本歌合より約四ヶ月前に詠出した『老若五十首歌合』では、雑歌十首中五首目以降の六首を羈旅歌としており、それをさらに徹底させたものと考えられる。雅経和歌について「幾度となく鎌倉へ下った為であらうか、旅情を詠じたものに優れたものがあり、その他も実感の歌が注意される。」(注十五)という指摘があり、また、稿者自身羈旅歌に雅経和歌の特徴の一つを見ることができると考え、『明日香井集』一四八五から一五三七を仮に「東国下向歌群」と名づけ考察を試みたことがある(注十六)。同歌群は建保三年(一一二五)に詠まれたものであるが、本歌合において雅経が雑歌を羈旅歌に統一し、また『老若五十首歌合』においても羈旅歌の比率が高いことから、雅経が建仁元年に既に、羈旅歌により自身の独自性を示すという方法を意識し始めていたのではないかと考えられる。またそのことは、本歌合で流行表現等の使用が減少したことと無関係ではないであろう。流行表現への関心が幾分薄れたことで、新たな方向を探ることになったとも考え得るが、それよりはむしろ、羈旅歌への意識という新たな要素が加わったことが、流行表現の使用の減少につながったのではないかと思われる。『八雲御抄』の「近き人の歌の詞をぬすみとる事」に見える記述により、雅経が建暦年間(一一二一〜一一二三)に、他の歌人の秀句を自詠に取り入れていることが知られるが、このことは流行表現を撰取る姿勢に通じると思われる。従って、本歌合において、『正治後度百首』・『老若五十首歌合』の際と比較すると流行表現等の使用は減少しているものの、十年後に至っても流行表現等への関心が失われることはなかったと思われるからである。

上記二首以外に目を転じると、十首中六首までが旅寝を詠んでい

ることが知られる。二首目から六首目と八首目である。二首目と五首目は「松の下」、三首目は山、四首目と六首目は海、八首目は野であろうか。二首目と五首目はともに松の下に風を配するが、五首目に天橋立という歌枕を詠みこむことにより変化をつけ、四首目と六首目とでは四首目が浮き寝、六首目は磯での旅寝という違いがあり、この六首は旅寝の種々相を主題としているのではないかと考えられる。四首目から六首目と八首目は旅寝の佳しさを詠んでおり、内容面ではいずれもどちらかといえば類型的で、実体験を反映させているようには思えないが、試みとしては評価できるのではないだろうか。雅経は、現在知られる限り、生涯で四回東国へ下向しているが、本歌合詠出時点ではおそらくまだ一度しか経験していない。すなわち、父頼経が、源義経に同心した罪科により伊豆に配流された後、年次は不明であるが雅経は鎌倉へ下り、建久八年（一二九七）後鳥羽院の命により上洛した、一往復である。雅経はその後も鎌倉への旅を繰り返す中で、羈旅歌に対する意識を高め、内容の充実を図って行ったのではないだろうか。

なお、十首目二九七九に見られる「ありあけ」の語を雅経は好んだと思われる。『明日香井集』一六七二首中五四首（三・二二二）に用いている。比較のため同時代の他の歌集及び本歌合の数値を示すと以下のようなになる。

『長秋詠藻』	六五二首	三首	〇・四六%
『秋篠月清集』	一六一一首	三七首	二・二九%
『壬二集』	三二〇一首	八三首	二・五九%
『拾玉集』	五八〇三首	一三四首	二・三〇%
『拾遺愚草』	二九八五首	四五首	一・五〇%

『後鳥羽院御集』	一七六八首	七八首	四・四一%
『千載集』	一二九〇首	二二首	一・六二%
『新古今集』	一九七八首	四一首	二・〇七%
『新勅撰集』	一三七四首	一七首	一・二三%
『千五百番歌合』	三〇〇〇首	六五首	二・一六%

『明日香井集』を上回るのは『後鳥羽院御集』のみであり、逆に俊成・定家父子は、家集と、それぞれが単独で撰んだ『千載集』『新勅撰集』ともに少ないことが知られる。『万葉集』に既に見られ、その後も多用されている歌語でありながら、比較的好みの分かれる語のようである。また雅経の場合、本歌合詠出年である建仁元年に一一三首、前年正治二年に六首、建仁二年に四首と、半数近くが集中しており、特にこの頃の雅経の関心を引いた語であると考えられる。ただし、このことについては、近い時間帯の曙などをも含めて考える必要があると思われる、なぜこの時期の雅経が多用したかといったことも合わせて、いずれ稿を改めて考えたい。ここでは事実の指摘にとどめる。

まとめ

以上、雅経の『千五百番歌合』詠について、三つの点から検討してきた。本歌取詠では、新しさの感じられる作も存するものの、本歌の二句余を取り、本歌と同じ位置に置く歌が少なからず見られる。本歌合以前の作でも指摘されている、本歌に依存する度合いが高い傾向が続いていることが知られる。ただしその中にも、主題の転じ方に工夫の見られる作もある。

流行表現・新しい表現の使用が見られるものの、『正治後度百首』・

『老若五十首歌合』に比べると減少している。ただし、『八雲御抄』等の記述から推測すると、以後大幅に減少することはないのではないかと考えられる。

雅経の雑歌は、羈旅歌で統一されているという特徴がある。そのうち六首が旅寝を詠んでおり、旅寝の種々相を描き出すことを意図したのではないかと思われる。後年雅経は羈旅歌に独自性を示しており、またそのことに自覚的であったと稿者は考えているが、その傾向が本歌合に既に見られることになる。ただし本歌合における羈旅歌は、内容はどちらかといえば類型的であると思われる。これは、本歌合詠出時点では、雅経はまだ東国下向を一度経験したのみであることと関わり、その後の旅の体験を通じて、羈旅歌に対する意識をより高めていったのではないかとと思われる。

雅経は、本歌合詠出後まもなく撰集作業が開始された『新古今集』の撰者の一人に加えられた。また本歌合から「しら雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞふく」(二二二) (二〇二) が『新古今集』に入集(巻一、春上、七四)している。これらから判断して、本歌合における雅経和歌は歌壇において一定の評価を得たものと思われ、以後雅経は後鳥羽院歌壇の主要メンバーの一人として定着して行く。ここに記した、本歌取詠における本歌への依存の度合いの高さ、流行表現・新しい表現への関心、羈旅歌における独自性、の三点はいずれも雅経和歌の特徴をなす要素であり、本歌合詠出時において雅経和歌の骨格は、おおよそ形成されていたのではないかと考えられる。またその中で羈旅歌に、その後深化が見られたものと思われる。雅経和歌については以後の作品を引き続き読み進め、その全体像を明らかにしたい。

注

- 一 有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』(風間書房、一九六八)二ページ、など。
- 二 『和歌大辞典』(この項谷山茂氏)、石川一氏『慈円和歌論考』(笠間書院、一九九八)二九四ページ、山崎桂子氏『正治百首の研究』(勉誠出版、二〇〇〇)四一四ページ、など。
- 三 本文・歌番号は、『万葉集』を除いて『新編国歌大観』により、『千五百番歌合の校本とその研究』(注二)を参照した。雅経歌は本文・歌番号とも『千五百番歌合』により、()内に『明日香井集』の歌番号を付す。本文異同は特に必要がない限り省略した。『万葉集』は、新編日本古典文学全集による。
- 四 拙稿「飛鳥井雅経の『正治後度百首』詠」(『日本文学』「日本文学協会」二〇〇四年一月号)。本歌合の本歌取については西畑実氏「千五百番歌合と本歌取り」(『大阪樟蔭女子大学論集』一一号、一九七三・一一)、浅岡雅子氏「千五百番歌合の定家の判詞―季歌における恋・物語の撰取をめぐって―」(『国語国文研究』九五号、一九九四・三)参照。西畑氏の調査によれば、本歌合における雅経の本歌取詠は二八首。
- 五 田村柳老氏『後鳥羽院とその周辺』(笠間書院、一九九八)二三〇ページ、渋谷康雄氏「正治元年九月四日藤原雅経の『詠五十首和歌』について―本歌取り技法とその表現―」(『愛知大学国文学』二六号、一九八六・十一)、注四の拙稿。
- 六 このほかに同様の例として次の五首がある。

春

一六六(一九九) はるもきてたちよるばかりありしよりかす

みのそでのむめのうつりが

・梅花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみ
ぬる 『古今集』卷一、春上、三五、よみ人しらず

秋

一〇九三(二三〇) ひさかたのあまのはごろもまれにきてち

ざりはつきぬほしあひのそら

・きみが世はあまのは衣まれにきてなづともつきぬいはほ
ならなん 『拾遺集』卷五、賀、二九九、よみ人しらず

冬

二〇七七(二六三) としくるるはるやむかしのはるならぬも

との身にのみたちかへりつつ

・月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身に
して 『古今集』卷一五、恋五、七四七、在原業平

祝

二二〇五(二六四) ちよをいのるかみのみむろのさかきばは

君がためしにしげりあひにけり

・神がきのみむろの山のさかきばは神のみまへにしげりあ
ひにけり 『古今集』卷二〇、大歌所御歌、一〇七四

恋

二六九七(二八三) むすぶてのしづくばかりをそでにみてあ

かでも人にやまの井の水

・むすぶてのしづくににごる山の井のあかでも人にわかれ
ぬるかな 『古今集』卷八、離別、四〇四、紀貫之

そのほか、「六七(二二六) 夏 花は春ちりにしみね
にあはれてふことをあまたにやらぬ白雲」は、「あはれてふ

事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ」(『古

今集』卷三、夏、一三六、紀利貞)の二句余を、位置こそ変
えているものの連続して取っている。

七 久保田淳氏『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、一九七
三初版、一九七八復刊)八七四ページ。

八 注四の拙稿。

九 『歌ことば歌枕大辞典』(久保田淳氏・馬場あき子氏編、角
川書店、一九九九)。「ゆきげ(雪気)」の項山田洋嗣氏。

十 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』(笠間書院、一九九
九)。

十一 大伏春美氏「千五百番歌合」藤原良経の判詩―『詞』を中
心として―(『徳島文理大学文学論叢』二二号、一九八五・三)

参照。

十二 鹿目俊彦氏『風雅和歌集の基礎的研究』(笠間書院、一九八
六)四四一―四四三ページ参照。

十三 和歌文学大系『新統古今和歌集』(村尾誠一氏、明治書院、
二〇〇二)脚注。

十四 『寂蓮の研究』(勉誠社、一九九六)九四九ページ。

十五 久曾神昇氏『崇徳天皇御本古今和歌集』(文明社、一九四〇)
二三―二四ページ。

十六 『明日香井集』「東国下向歌群」(仮称)考(大野順一先生
古稀記念論文集刊行会編『日本文芸思潮史論叢』「ぺりかん
社、二〇〇二」所収)。